

『ペスト』と共同体

猪 又 俊 樹

はじめに

アルベール・カミュの1947年6月に発表された『ペスト』について書かれた、ロラン・バルトの『『ペスト』——疫病の年代記か孤独の小説か?』という1955年の論文がある。バルトはエミール・リトレの『フランス国語辞典』(1863-1877)を引きながら、『ペスト』はまず年代記であると言う。事実の原因と結果を研究する歴史に対して、『ペスト』は歴史を奪われた世界であり、そこには何の進展も解決もないとされる。バルトは「『ペスト』には構造がない。「ペスト」には因果関係がない。「ペスト」と過去でありうるような他所、他の場所、他の事実とは何のつながりもない。ひとことでいえば、関係性がない⁽¹⁾」とし、要するに『ペスト』は日常に迷い込む一つの事実であるところのペストを記していく年代記であるとされる。『ペスト』には悲劇的な要素があるが、悲劇の浄化はない。なぜならペストは日常の一部であるただの「必然性」にすぎないからである。それでもそれに対抗しようとしている『ペスト』は「必然性」を認識することによってはじめて自由を意識することができるという意味で、「自由のモラル」を提起しているという。確かに「ペスト」は第二次大戦のフランスの「占領」と「抵抗」という「人間の顔」に置き換えて読むこともでき、それによって共感を得ることも出来るが、連帯、友情という『ペスト』のモラルだけでは現実の「歴史」に対抗することは難しい。しかし『ペスト』の人々は「無垢」であろうとし、「死刑執行人にも犠牲者にもならない」ために、孤独を引き受けているのである。このようにバルトは『ペスト』を必然的な日常を生きる孤独な人々の年代記であると位置付けている。

これに対してはカミュの反論がある。それが「カミュからバルトへ反論する書簡」である。自著である『ペスト』について彼は、まず『ペスト』はナチズ

ムに対するヨーロッパの抵抗を明白な内容としており、それは自分がドイツ占領中に『ベスト』の一部を発表していること⁶³からも明らかであると言う。次に『ベスト』は全く議論の余地なく、孤独な反抗から、「戦いを共にするひとつの共同体 *une communauté dont il faut partager les luttes*」への移行を示していると言う。つまり、アルジェリア⁶⁴の（フランスの）あるひとつの都市、オランに忍び寄るベストであるナチズムによって、最初ばらばらであった街の人々がベストへの戦いへと徐々に目覚めるのは、これは一つの都市の問題ではなく、第二次大戦時のレジスタンス運動の隠喩であるのは明確だということである。『ベスト』が反歴史的道德と孤独の社会学を打ち立てているというバルトの説には到底承服できない。バルトが、いくらベストが人間的な相貌をしていて、人々はそれにたいした抵抗ができないと言ったとしても、恐怖政治は様々な相貌を持って現れるのであり、それに対して人々はあらゆる抵抗運動を繰り広げるだろう。このようにカミュは作者であるという自分を強調しながら、『ベスト』の歴史的意義を語っている⁶⁴。

このように、ベストはナチズムであるという見解は、カミュのこの反論を受けて、広く受け入れられている。しかし改めて考えてみれば、一体『ベスト』のなかの何がナチズムを意味しているのか、ベストに対して戦う登場人物たちの何が対独レジスタンス運動を意味するのかということとは、カミュの説明を根拠とすることによって、今までさほど検討されることはなかったように思われる。そこで『ベスト』を改めて見直しながら読む必要があると思われる。そのなかで、彼も使用している、戦いを共にする「共同体 *communauté*」という言葉にこだわりながら検討していきたい。

1. ナチズム、戦争、ベスト

『カミュの手帳』によれば、『ベスト』は第一の系列である「不条理」に続く、第二の系列の「反抗」のなかに位置付けられている⁶⁵。「反抗」のほかの作品は『反抗的人間』、『キャリアエフ⁶⁶』となっている。第一の「不条理」は『異邦人』、『シーシュポスの神話』、『カリグラ』、『誤解』とされており、「不条理」という点において特に疑問視されることはなく妥当なところだろう。第三の系列は『審判⁶⁷』と『最初の人間』である。さらに第四と第五の系列がある⁶⁸

が、これはカミュの死により書かれることはなかった。しかしこの系譜は一見明確なように見えるが、これがほぼ年代順になっていることに注意する必要がある⁹¹。確かにこの系列通り、カミュの前期のテーマは不条理であり、後期は反抗であるというこの見解は共有されている意見であると言える。しかし不条理がナチズムであるならば、それを克服するためのこの『ベスト』の様な反抗はナチズムへの有効な反抗と言えるのだろうか。たとえばバルトが、上記した論文で指摘するように、「死刑執行人となることを恐れ、傷の元凶たる行為を攻撃しないで、傷を手当てするだけで満足する」ことがナチズムへの反抗、レジスタンスになるのだろうか。手当てするだけの医師がナチズムに対抗できるのだろうか。レジスタンスが受け身な行為だけで成り立たないことはほかならないカミュ自身がよく知っていることなのではなからうか⁹²。そしてそもそも不条理を克服するというに意味があるのだろうか。『シーシュポスの神話』によれば、「幸福と不条理は同じひとつの大地から生まれたふたりの息子⁹³」であり、人はだれもが死ぬという宿命以外は、不条理な人間は自分こそが自分の日々の生活を支配するのだと語っていなかっただろうか。このようにベストと住民たちを、ナチズムとレジスタンス活動と読み替えるとそこには様々な矛盾が湧きあがってくる。この『カミュの手帖』による系列は、ロットマンも出版のために後から書き換えたと言っている⁹⁴ように、カミュ自身による、計画の体系であり、実際の内容は、時代の背景の変化によって彼の意向も変化していたと思われる。テキスト上では実際にこの系譜のように厳密に分類できているとは思われない。しかし、『ベスト』に入る前に、バルトのカミュに対しての批評について、前提としなくてはならない点について述べておかななくてはならないだろう。それはバルトの「作者の死」である。

バルトは論文「作者の死」において、「作者」というものはわれわれの社会によって作りだされた近代の登場人物であり、「言語学的には、作者は、書いている者以上のものでは決してなく、まったく同様に、私 je は私 je と言う者にほかならない⁹⁵」と言う。今後は、作者ではなく書き手はテキストと同時に誕生し、起源をもたない場を書き出すのだと。このように作者が消え去ることにより自分の意図や計画（起源）に反して「テキスト」が存在しているというのは、作者の言うことを無視して、いかようにも読者が分析してもいいのだという、ポスト構造主義に対する誤解を生んだ。しかしこれは作者の言っているこ

とに意味がないと決めつけるということではなく、書き手がテキストと同時に誕生するのだと言っている点からうかがえるように、『ベスト』と、ナチズムと抵抗を考えたカミュは同時に生まれているのだと言える。「物語の構造分析序説」でバルトが言う通り、物語は認知的constatif秩序という作者の位置から、遂行的performatif秩序という書き手とテキストが同一化している状態へと移行していることを示しているのである⁶⁶。つまりカミュが戦中というドイツ占領下に『ベスト』の一部を発表し、書き続けていたという事実を除いて『ベスト』について述べることはできない。例えばこれはモーリス・ブランショが、やはり戦中に書き続けていたジョルジュ・バタイユの『有罪者』について書いていることだが、これはそのままカミュにも当てはまると思われる。

戦争の重圧の下で書くこと、それは戦争について書くことではなく、戦争の地平の中で、それがあたかも床を分かち合う伴侶であるかのようにして（戦争が人にわずかな場所を、自由の余地を残すものとして）書くことなのである。⁶⁷

このように、戦争中に書かれた『ベスト』が戦争やナチスと関係がないということはありえないだろう。そのなかで書かれた『ベスト』は戦争と密接な関係があり、戦争という死と共にある。カミュが書こうとしたナチズムと対独レジスタンスもまたカミュが書いた『ベスト』の一部としてそこに「含まれている」のだ。それはバルトでさえ上記した論文のなかで「ベスト」をフランスの「占領」、「抵抗」と読みかえることができるのは確かだと言っていることから明らかであろう。この含まれており、また共にあるという点は注意しておきたい。

それでは『ベスト』を見てみよう。『ベスト』の主要な登場人物は、シチリアの百姓風で、ベストと献身的に戦う、医者であるベルナル・リウーと、どこかからオランに流れ着き、ホテル住まいをしているジャン・タルーである。タルーは医者を手伝うための保険隊を組織してベストと戦う。この二人はベストを記録しているという点で共通している。この『ベスト』という物語を記録しているのはリウーであり、『ベスト』のなかに度々挿入されるタルーの手帳も、ベストについて、もしくは周りの人間についての記録であり、リウーの記

録のための資料となっている。そのほかにはアラブ人の衛生状態の調査にやってきて、オランから出られなくなってしまうジャーナリスト、レイモン・ランベール、自殺未遂を起こし、その後密輸に手を染めるコタールといった人物たちが登場する。このなかのリウーを見てみよう。まず、『ペスト』のよく知られているラストシーンである。

事実、市中から立ち上る喜悦の叫びに耳を傾けながら、リウーはこの喜悦がつねに脅かされていることを思い出していた。なぜなら、彼はこの歓喜する群衆の知らないでいることを知っており、そして書物の中に読まれうることを知っていたからである——ペスト菌は決して死ぬことも消滅することものないものであり、数十年の間、家具や下着のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに、しんぼう強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸 *malheur* と教訓 *enseignement* をもたらすために、ペストがふたたびその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差向ける日が来るであろうということ⁹⁴を。

最初にそう言われていれば、この部分は確かにナチズムというものは常にあらゆる場所の中に潜んでおり、それはいつかまた復活し、人々を脅かすであろうというふうに読める。ナチズムは人々の日常の生活のなかに潜んでおり、それは共にあり、いつか溢れ出すのだと。しかしここではペストが不幸と同時に教訓をももたらすのだと書いてあるところに注意したい。カミュの言うようにペストがナチズムなら、それは不幸と同時に教訓 *enseignement*⁹⁵ ももたらすのであろうか。というよりもそもそもナチズムは「不幸」と言って済まされる問題であろうか。いくら恐怖政治が様々な相貌を持って現れると言ってもそれは「不幸」なことだと言って済むのだろうか。たしかに医者であり、戦い続けたリウーはペストが決してなくなることはないという事実を知っている訳だから、それがいつしか確実によみがえり、不幸と教訓をもたらすであろうことも、もちろん知っている。これはつまり言ってしまうと、リウーは不幸と教訓のために、ペストが収まって安心していうよりは、実はそのいつか到来するペストを待ち望んでいるように見える。その理由については徐々に見ていくが、

このように見て行けば、ベストがいつ到来するのかわからないし、リウーにもわからない存在であり、それはナチズムというよりは天災のように人々を襲い、人々を浄化するかのようなのである。

次に、自殺未遂者⁸³、つまり他から来たベストよりも前から死と隣り合っていたコタールを見てみよう。ベストで街が閉鎖されている間、密輸に関係していたコタールは、街の解放後、気が狂って（自暴自棄になって？）窓から銃で人を撃ち、警官の突入によって捕まり、衆人の前で警官によって二度殴られる。ここで、このコタールを第二次大戦中のフランス占領下の対独協力者であるコラボだと連想することもできる。だがコタールを見てリウーが考えるのはそう単純なことではない。

しかし、リウーはしきりにコタールのことが思われ、コタールの顔に打ちつけられた拳の鈍い音が、喘息やみの爺さんの家へ向かう途中、ずっと付きまどって離れなかった。おそらく、罪を犯した人間のことを考えるのは、死んだ人間のことを考えるよりもつらいかもしれない。⁸⁴

ここにはコラボを悪として懲罰を与えるというよりも、コラボの悪に加担した「罪」と「恥」というものが、死んだ人間のように近しく感じられるものではなく、生き残った自分たちの「罪」と「恥」も考えなくてはならないという含みを感じられる。事実、カミュは雑誌「コンバ」において、戦後フランソワ・モーリャックとの論争によって、コラボの粛清に一度は同意してしまったものの、あとからそれが間違いであったことを認めている。カミュは対独運動によって、ゲシュタポに捕らえられて銃殺された友人のルネ・レイノーなどを知っていたし、多くの友人がナチスのせいで不具になったりした。カミュがそのことによってコラボを許し難く思ったのは、当時としてはある程度仕方がないことかもしれないし、それがカミュも含めたフランス国民の感情でもあった。しかしここでリウーが「罪を犯した人間のことを考えるのは、死んだ人間を考えるよりもつらいかもしれない」と考えるとき、ジャン・ムーランのような死んだ英雄を考えるのは易しいが、ロベール・ブラジャックのような生き残ったコラボについて考えることへの苦悩が感じられる⁸⁵。対独協力によって死刑の判決を受けた作家ブラジャックの助命の署名に、迷ったあげくカミュはサインをす

るが、その後カミュは解放後の粛清を煽った自分が間違っていたことを悟った²⁰。ベストはどこにでも存在しており、いつ到来するかは分からない。つまりベストがトランクやハンカチの日常のなかにある以上、生き残った自分が次はコラボになることもあり得るし、そのように生き残ったことは「恥」でもあるということになる。ベストの後に生き残ったコタール（そして戦後、生き残ったブラジャックの罪）は同じく生き残った自分の恥であり、死んだ人間のほうが正しい位置にいるかもしれない。リウーはそう考えるのである。『ベスト』全体を通して出てくる喘息病みの老人も言う「いちばんいい人たちが行っちゃもうんだ²¹」と。

このように改めて見直してみると、これは本当にカミュが言うようにナチズムに対抗する連帯を描いた物語であるのかよく分からなくなってくる。パルティックなテキスト分析にこだわらなくても、歴史に関係しなくてはならない伝記を書いているH・R・ロットマンが、カミュが「解放者ベスト」という言葉を日記に書いていることから、「作者の様々な意図は、最初のころから、かなり矛盾を孕むものであった²²」という指摘を見ることもできることからカミュの迷いはうかがえる。それでは『ベスト』をナチズムとレジスタンスの隠喩とする以外に、それはどのように読まれることができるだろうか。鍵になるのは「共同体」という言葉である。

2. 死との共同体とベスト

まず今まで見てきたように「不幸」と「教訓」であるというベストは、ナチズムとは切り離して読むべきではないだろうか。ナチズムが行ってきたことは「不幸」でも「教訓」でもなく、それは人類の絶対的な悪であると言える。しかしそれはコラボの罪と恥というものについてリウーが考えたような、自ら引き受けなくてはならない悪であるという事実に至る。だが、リウー自身はベストに対抗する「戦いを共にするひとつの共同体」を信じようと思う。にもかかわらず、同時にリウーは常に宙吊りにされたような感覚をもっており、「戦いを共にするひとつの共同体」が本当に有効なのか確信がない。つまり、ここでナチズムに対抗するレジスタンスではない、他の「共同体」というものを考える必要がある。リウーやタルーのベストへの反抗によって確かにオランの街は

守られた。しかしそれは一時的に食い止められたに過ぎないし、事実、タルー、パヌルー神父、予審判事オトン氏といったベストに対して献身的な活動をしてきた人々、そしてオトン氏の息子である「まったく、あの子だけは、少なくとも罪のない子供でした⁶⁰」と呼ばれたフィリップといったリウーに近い人々はほとんどがベストで死ぬ。ベストとは関係がないはずのリウーの妻でさえも、オランの外にある療養所で死んでしまう。それは終わりのない敗北である。リウーは他人の死というものに常に関わっており、このように「戦いを共にするひとつの共同体」を考えることにより、近い人々が死んでいくということが、その共同体からの離脱を促し、孤独へと傾斜していく。リウーはベストによって苦しみぬいた末に亡くなったオトン氏の息子の死んだあと、パヌルー神父に「子供たちが責めさいなまれるように作られたこんな世界を愛することなどは、死んでも肯んじません⁶¹」と語る。リウーは世界、自分の生きている世界を放棄しようとしており、それが「戦いを共にするひとつの共同体」から投げ出され、複数の死者との共同体へと移行する。新聞記者であったランベールも、オランが開放され、恋人と出会い抱き合うが、それが本当に待ち望んでいたことなのか分からなくなってしまふ。ランベールは恋人に会うために、オランから出るべく密輸に関わっていたコタールの手を借りたりしながら、脱出する手段を探し続ける。しかしその手段を見つけたにもかかわらず、ランベールはオランを出ることを止めてしまふ。これはランベールにとって、ベストのオランという街が近い世界となっており、彼はその世界の一部となってしまうがゆえにそこから出ることができなくなってしまったのだと言える。ランベールは他人の死と離れられなくなっており、この他人の死について、モーリス・ブランショは次のように言う。

死に接して決定的に遠ざかってゆこうとする他人の間近に現前し続けること、他人の死を、自分に関わりのある唯一の死でもあるかのようにおのれの身に担いとること、それこそが私を自己の外に投げ出すものであり、共同体の不可能性のさなかにあって共同体を開示しつつ、その開口部に向けて私を開くことのできる唯一の別離なのである。⁶²

ここで現れるのは、おそらく複数の死者との孤独な、そして無為の共同体で

ある。「無為の共同体」というジャン＝リュック・ナンシー的な表現を言いかえれば、それは「死との共同体」と言っていかもしれない。死にゆくひとの前に現前しながらも、その自分という存在は死ぬわけではない。他人が死んだことは知ることはできるが、自分の死を知ることは不可能である。ただ他人の死と共にあることができるだけである。ブランショは、同胞が死んでいくのに立ち会うとき、生きている者はもはや自己の外に投げ出されていなければそれに耐えられないというバタイユの言葉を引用している⁹⁹。つまりそれは他とは何のかかわりもない、自己の外に投げ出された、内的な、孤独な、死者だけが共にいる共同体であることになる。同じようにバタイユ的な、死による脱・自に関してナンシーも次のように語る。

共同体が他人の死によって開示されるとしたら、それは死がそれ自体死すべき者たちの真の共同体だからであり、彼らの不可能な合一だからである。共同体は従って次のような特異な位置を占めている。すなわち共同体はそれ自身の内在性が成立せず、主体としてそこに属することができないという、そうした不可能を引き受けているのである。¹⁰⁰

ナンシーが言うように、真の共同体が不可能な合一であり、そしてその共同体が主体を受け入れることがない以上、タルーが作ったような「戦いを共にするひとつの共同体」は真の共同体ではないものとなる。それに対して、リウーのようにベストによって巻き込まれた死と共にある世界こそが「共同体」であると言える。それはブランショが言ったように戦争、つまり死を伴侶として書かれたものである。戦争や死はいつ到来するか分からないし、到来した結果のそれを自分では意識することもないし、できない。事実の結果としての他人の死は意識できても自分の死は意識できない。しかしその死との共同体こそがタルーの待ち望んでいる「共同体」であり、それは「決して死ぬことも消滅することもなく、数十年の間、家具や下着のなかに眠りつつ生存することができ」る「共同体」なのである。バルトも『ベスト』はそれが不条理であるが受け入れるものとして見ている。

私たちの目の前にいる、この平凡な人間たちはだれもが「ベスト」をベストとして認め、ベストを見据え、直視し、いかなる時もベストの不条理に対して抗議の声をあげない。「ベスト」の悪を前にして、彼らはベストから目をそらそうとはせず、形而上的あるいは修辭的幻想のもたらす常套の隠れ家に逃げ込もうとはしない。彼らにとって「ベスト」は、いわば生の状態で受け入れる「必然性」であり、抗議したり、浄化したり、正当化したり、はぐらかしたりできるものではない。⁸⁸

この、必然的に「生の状態」で引き受けられる不条理は死に他ならず、カミュ自身が不条理と幸福は同じ大地から生まれた二人の息子だと言ったように、ベストは不条理であるにも関わらず、それと共にあることが幸福な死との共同体であるということになる。『異邦人』や『カリギュラ』からのテーマである、死である不条理は続いており、それは『ベスト』でも受け継がれていると言える。ただバタイユが、(不条理と)反抗のモラルがあつという間に力ない不幸のモラルに横滑りしてしまう可能性がある⁸⁹、と『ベスト』に関して言うように、『ロラン・バルトへの手紙』でカミュが言っている、志向された「戦いを共にするひとつの共同体」は、バタイユが言うように統一をとるためにこの不幸な、平凡なモラルを想定したにすぎないのかもしれない。結局、このカミュの『ベスト』によって示されているのは、共同体というものが幻想の共同体であるナチスのような国民国家の枠を超えようがない以上、もしくは「戦いを共にするひとつの共同体」といういわば意識的に作られた共同体が敗れるのが確実な以上、主体的な生者の共同体というものはあり得ないということである。カミュもまたアルジェリア戦争における態度を見ても分かるとおおり、国民国家の枠を超えることはできなかった⁹⁰。しかし『ベスト』では「ベスト」という不条理を受け入れることにより、死との共同体の可能性が垣間見えている。そう、「共同体」とは死との共同体である。それでも、もし現実にあり得るとしたら、それはブランショが言う、「死に接して決定的に遠ざかってゆこうとする他人の間近に現前し続け」ながら、死者と侵食し合い、傷つけあい、自己の外に投げ出されながら存在している生者の共同体でしかあり得ない。しかし念のため言っておきたいが、これはよく言われるような過去を見つめ、反省するというような温故知新などというものを意味するのではない。そのような「教

訓」ではなく、文字どおり死とともにあり、生きながら死んでおり、死と一体になりながらも一体ではなく、いつ到来するかは全く分からず、気が付いたら、いや気付こうがそうでなかろうが巻き込まれている、という世界が死との共同体なのである。

しかしその現実の「共同体」というものは、どのような「恍惚extase」なのだろうか。それはブランショの68年5月⁸⁹なのだろうか。少なくとも、カミュのレジスタンスではなく、『ベスト』のオランで行われていた馬鹿騒ぎ、おそらくカミュやサルトルの占領下の《饗宴》⁹⁰あたりがそれを体現している一つの例なのかもしれない。占領下、死んでいるとも生きているともつかない、忘れられたようで忘れ去られてはいない、中間の煉獄のような世界。今はあるが明日はないかも知れない世界。『ベスト』は外から（法によって）街が閉じられることによって始まり、外から街が開かれることによってそれが終わるということに注意しなくてはならない。それは不意に訪れ、不意に消え去る。これが意味しているのは、共同体は時間、空間の全く一瞬の交差上にしかあり得ないということだ⁹¹。波と波が合わさって出来る渦、風と風が合わさって出来る竜巻のように。しかし一瞬とはいえ、渦は船を飲み込み、竜巻は家を破壊し木をなぎ倒す。そこには事実が残る。そう「事実だけ」が。つまりその事実とは残滓という名の死であることになる。では今まで検証してきた、リウーの「死との共同体」との事実はどんな時に現れるのか。それはどのようにすれば検証可能なのだろうか。そもそもそれを意識できるのであろうか。なぜこのような疑問を呈するのかと言えば、ここからが問題なのだが、「死との共同体」と不幸な「死への共同体」は結果的に残った事実だけによってしか区別できないということである。つまり残滓という事実からは内部は分からないのである。幸福に死んだのか、恥辱にまみれて死んだのか外部からは分からない。そしてさらにその共同体によって起こされた事実が本当に「よい」ものとなるかどうかは結果的に（歴史的に？）しか分からないことになる。「血と大地」のナチズム、ルワンダでツチ族を虐殺するフツ族の共同体、ポルポトの農村共同体、これらはすべて共同体を志向している。言い方を変えれば自らによって閉ざされた共同体「しか」志向していない。であるから思考すべきなのはブランショが『明かしえぬ共同体』で言うような、「共産主義のもつ要請⁹²」、つまりその不幸な言葉となった共産主義 *communisme* という言葉がふくむ共同体 *communauté* に

関する考察であり、それは歴史が示したように一つの一体性を持つと同時に、それ自体抹消されてしまう、ただ死へと向かっている共同体となってしまうように見える共産主義という言葉をいかに救っていくかということなのである。ということは、そうさせないためには共同体を志向せずに共同体を夢想するという、ほぼ不可能な、無為なものでしかあり得ないことになる。ブランショによれば、バタイユは何らかの集会的位格における融合の実現を排除し、深い嫌悪さえ抱いていたという⁹⁶。つまり「恍惚」と言っても、それはナチズムのような忘我の熱狂を意味するのではなく、不充足でありながらその不充足性を断念できずに、ゆさぶられ、おのれの外に投げ出されるという脱・自（恍惚）なのである。だからいまここには、『ベスト』のような不意に到来する、死との共同体しか共同体はおそらくない。

おわりに

だとしたら、共同体について書くことに意味はあるだろうか。それはバタイユが、反抗が不幸の法則の受容になり、絶え間ない敗北が勝利より意味があり、極端まで戦う者に聖性が保証される⁹⁷と言っていることが重要であると思われる（もっとも上記したようにそれはすぐに横滑りする危険性があるのだが）。アルジェリアとフランスとの共同体を目指した後、挫折し、追い込まれたカミューは最後には、「アルジェリアのフランス人」という血と大地に戻ってしまった。しかしその挫折は自らの書物によって記されていたと言える。それがつまり『ベスト』である。志向された共同体は挫折し、死との共同体だけがリウーには残った。以上、述べてきたように、そこは死者とともにあり、いつでも死者になりうる境界の世界なのである。しかし『ベスト』の世界のなかでは他の世界の人間にも触れられる。なかには死者に無関心だし、死に全く関係ない人々もいる、とりウーは考える。オトン氏の息子の死により、世界を放棄したりウーは、「自分の目で見ることのできぬ苦痛はどんな人間でも分かち合うことはできない⁹⁸」と思う。その場その時に同伴していない人間には理解不可能な世界なのである。それは死とともにある共同体だからであり、罪のない子供の死を知っている人でなければその世界を愛せないし、愛する資格もないと言える。つまり死との共同体とともに、殺された人にならなくてはならない。それがリ

ウーの「共同体」なのである。しかしだからこそ共同体について述べることに意味があるのだろう。

以上見てきたように、『ペスト』は死との共同体に向けて開かれたテキストである。したがって、「ペスト」をナチズムの隠喩として読むことももちろん可能だが、『ペスト』をそこから解放し、開かれたテキストとして読むことも可能となる。そこにあるのは、死とともにある実存とともに、いかにしてともに生きるかという新たな共同体への試みの物語なのである。「共同体」である「ペスト」を待ち望むリウーの態度は、「歓待」へとつながっていくと思われるが、それは今後述べて行きたい。

- (1) 初出は *Club*, février 1955. Roland Barthes 《《La Peste》, Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?》in *Œuvres complètes, TOME I, 1942-1965*, Édition du Seuil, 1993, p.452 (『『ペスト』——疫病の年代記か孤独の小説か?』『ロラン・バルト著作集2 演劇のエクリチュール 1955-1957』大野多加志訳, みすず書房, 2005年, p.12)
- (2) 最初, ペストの一部は『メッサージュ』1943年8月号に掲載された。
- (3) 1962年のアルジェリア独立まで, フランス政府によれば, アルジェリアは, 植民地でもなければ, 保護領でもなく, フランスの地方の3つの県であるという認識であった。
- (4) これも初出はバルトと同じ *Club*, février 1955. 書簡の日付を見ると1月11日となっており, つまりバルトの論文に対して急ぎよ書かれたものだと分かる。Albert Camus 《Lettre d'Albert Camus à Roland Barthes sur 《La Peste》》in *Roland Barthes Œuvres complètes, TOME I, 1942-1957*, op.cit., pp.457-458 (『カミュからバルトへ反論する書簡』『ロラン・バルト著作集2 演劇のエクリチュール 1955-1957』, 同著, pp.19-22)
- (5) 『カミュの手帖1935-1959[全]』大久保敏彦訳, p.314
- (6) 後の戯曲『正義の人々』を示す。
- (7) のちの小説『転落』を示す。
- (8) 参考に挙げておけば, 第四の系列——引き裂かれた愛。『火刑』——『愛について』——『誘惑者』, 第五の系列——『修正された創造』あるいは『体系』——長編小説+大瞑想録+上演不可能の戯曲, となっている。(『カミュの手帖1935-1959[全]』前掲書, p.314)
- (9) 簡単に年数を挙げておく。『異邦人』1942年6月刊行, 『シーシュポスの神話』1942年10月刊行, 『誤解』1944年6月初演, 『カリギュラ』1945年9月初演, 1947年6月『ペスト』刊行, 『正義の人々』1949年11月初演, 『反抗的人間』1951年10月刊行, 1956年1月『転落』刊行
- (10) 例えばカミュが対独活動として地下で行っていた「コンバ」に関係したことが分かれば, 収容所に送られたりもしたし, 積極的な活動をしなければ, 「コンバ」を発行することは不可能だった。
- (11) Albert Camus, *Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965. p.197(『シーシュポスの神話』清水徹訳, 新潮文庫, 1969年, p.172)
- (12) H.R.ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』大久保敏彦・石崎晴己訳, 清水弘文堂, 1982年, p.471

- (13) Roland Barthes 《La mort de l'auteur》 in *Œuvres complètes, TOME 2, 1966-1973* Édition du Seuil, 1994, p.493
- (14) Roland Barthes 《Introduction à l'analyse structural des récits》 in *Œuvres complètes, TOME 2, 1966-1973* Édition du Seuil, 1994, p.97
- (15) Maurice Blanchot, *La Communauté Inavouable*, Les Édition de Minuit, 1983, p.14 (『明かしえぬ共同体』西谷修訳, ちくま学芸文庫, p.16)
- (16) Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1962. p.1474 (『ベスト』宮崎嶺雄訳, 新潮文庫, 1969年, p.368)
- (17) この enseignement は一般的には「教育」と訳される。
- (18) カミュは、『シーシュポスの神話』において、重要な問題は自殺の問題のみであると語っている。しかし『ベスト』のコタールでは、自殺は退けられる。ここでは自殺を問題としなくなっているカミュを見ることができだろう。
- (19) Ibid., p.1472 (同書, p.365)
- (20) これに関しては西永良成の「カミュと対独協力派粛清問題」(バイディア 特集=アルベール・カミュ 9月号, 竹内書店, 1972年)を参考にされたい。このなかで西永は、カミュの前期の「不条理」から後期の「反抗」への思想的变化は一時期とはいえ、コロボの粛清に賛成してしまっただことが原因であると書いている。
- (21) H.R.ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』, 前掲書, pp.448-449
- (22) Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, op.cit., p.1472 (前掲書, pp.365-366)
- (23) H.R.ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』, 前掲書, p.290
- (24) Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, op.cit., p.1396 (前掲書, p.258)
- (25) Ibid., p.1397 (同書, pp.259-260)
ちなみにカミュはドストエフスキーの『悪霊』を演劇化しているが、ドストエフスキーとも共通する、無垢な子供の死は重要である。この問いはのちの『正義の人々』にも持ち込まれる。
- (26) Maurice Blanchot, *La Communauté Inavouable*, op.cit., p.21 (前掲書, pp.25-26)
- (27) Ibid., p.21 (同書, p.26)
- (28) ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体 バタイユの恍惚から』西谷修訳, 朝日出版社, 1985年, p.47
- (29) *Œuvres complètes, TOME 1, 1942-1965*, op.cit., pp.457-458 (『ロラン・バルト著作集2 演劇のエクリュール』, 前掲書, p.14-15)
- (30) ジョルジュ・バタイユ「不幸のモラル——『ベスト』——」『言葉とエロス』古屋健三訳, 二見書房, 1971年, p.234
- (31) とは言え、カミュの考えていたフランスという国民国家は、「アルジェリアのフランス人」や「アラブ人」も含む連邦を意味していた。そのカミュのこだわりについては、拙著「アルジェリアのフランス人」のモラル——「客」をめぐる——(『一橋研究』第31巻第2号)を参照。
- (32) ブランショは68年5月について、それは不意に訪れた幸福な出会いの中で、未知の人であるがゆえにすでに仲の良い友人として付き合える開域が、企ても謀議もなしに発現しうるのである、と述べている。(Cf. Maurice Blanchot, *La Communauté Inavouable*, op.cit., p.52 (前掲書, p.64))
- (33) H.R.ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』, 前掲書, p.333
- (34) 例えばパリ・コミューンが帝政の終わりによって生まれ、そしてつぶされたように。
- (35) Maurice Blanchot, *La Communauté Inavouable*, op.cit., p.9 (前掲書, p.9)
- (36) Ibid., pp.18-19 (同書, p.22)
- (37) ジョルジュ・バタイユ「不幸のモラル——『ベスト』——」, 前掲書, p.233
- (38) Albert Camus, *Théâtre, récits, nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, op.cit., p.1332 (前掲書, pp.164-165)